

## 第5章 郷土の伝統・文化と先人たち

### 【古くから残るもの】



寒中みそぎ祭り（木古内町）



松前神楽（松前町）



アイヌの衣服



アイヌの住居（復元）



### めあて

道内には、どのような古いものが残されているでしょうか。

また、郷土の発展につくした人々はどのようなことをしたでしょうか。

私たちが住んでいる道南は、北海道の中では、古い時代の記録がたくさん残る場所です。古くから残るものについて調べて、くわしく知りたい、考えたいことを学習問題としましょう。



北海道は自然が豊かな所という印象がありますが、古くから続く文化や暮らしもあるのでしょうか。



アイヌの人たちは、1万年以上前から、北海道のさまざまな場所に住んでいました。600年くらい前から、道南に和人が移り住み始め、アイヌの人たちといっしょに暮らしていた時代がありました。その時代に和人が残した記録があります。

その後、170年ぐらゐ前、明治時代になり、さらに多くの和人が、本州から北海道に、移住するようになりました。

## 第5章 郷土の伝統・文化と先人たち

さんこう  
資料

### 【アイヌ民族について学ぼう】



アイヌの住居



アイヌの文化

しら  
調べる

ほっかいどう  
アイヌ民  
族はどう結びつ  
いてい  
るの  
でし  
ょう  
か。

二次元コードはスキャン

ワークシート

ここを  
クリック



アイヌ民族は、北海道やその周辺に古くから暮らし、自然と深くつながりながら生活してきました。アイヌの人たちは、どんな場所で、どんな季節の暮らしをしていたのでしょうか。



学校で配られる副読本『アイヌ民族：歴史と現在』を見てみましょう。そこには、アイヌの人たちの生活や文化、そして木古内という地名がアイヌ語がもとになっている理由も書かれています。



アイヌの人たちは、どうして狩りの生活をやめたのでしょうか。何か大きなきっかけがあったのでしょうか。



私も知りたいです。りくさん、一緒に調べてみましょう。

## 第5章 郷土の伝統・文化と先人たち

【<sup>どうなん</sup>道南に<sup>のこ</sup>残る<sup>でんとうぎょうじ</sup>伝統行事を<sup>しら</sup>調べよう - 寒中みそぎ祭り<sup>かんちゅうまつ</sup>】



寒中みそぎ祭り（木古内町）



寒中みそぎ祭り（木古内町）

<sup>かんちゅう</sup>寒中みそぎ祭り（<sup>まつ</sup>佐女川神社の「みそぎ祭<sup>さい</sup>」）は、<sup>きこないちよう</sup>木古内町の人たちが<sup>たいせつ</sup>大切にしている<sup>でんとうぎょうじ</sup>伝統行事です。<sup>まいとし</sup>毎年、<sup>がつ</sup>1月に<sup>おこな</sup>行われます。<sup>にん</sup>4人の<sup>わかもの</sup>若者が<sup>えら</sup>選ばれ、<sup>みず</sup>水を<sup>あ</sup>浴びたり、<sup>うみ</sup>海に入<sup>はい</sup>って<sup>じんじや</sup>神社の<sup>ごしんたい</sup>御神体を<sup>きよ</sup>清めたりします。



ぼく、<sup>なんど</sup>何度も<sup>み</sup>見たことがあります。<sup>ぎょうしゅうしゃ</sup>行修者に<sup>えら</sup>選ばれた<sup>にん</sup>4人の<sup>ひと</sup>人たちが、<sup>つめ</sup>冷たい<sup>みず</sup>水をかぶり、<sup>ゆき</sup>雪の中を<sup>な</sup>海まで<sup>うみ</sup>歩いて、<sup>はだか</sup>裸で<sup>うみ</sup>海に入る<sup>はい</sup>姿は、<sup>すがた</sup>立派だと思<sup>おも</sup>いました。



なぜ、<sup>むかし</sup>昔から<sup>たいへん</sup>こんな大<sup>な</sup>変なことを<sup>な</sup>してきたのでしょ<sup>う</sup>うか。何か<sup>おお</sup>大きな<sup>い</sup>意味がある<sup>の</sup>のですか。



その<sup>い</sup>意味を<sup>かんが</sup>考えるのは<sup>むずか</sup>難しいことですが、<sup>がくしゅう</sup>学習の<sup>だいじ</sup>大事な<sup>ポイント</sup>ポイントの<sup>ひと</sup>一つです。自分たちで<sup>しら</sup>調べて<sup>み</sup>みましょう。

### <sup>しら</sup>調べる

<sup>さい</sup>みそぎ祭は、<sup>う</sup>どのようにして<sup>う</sup>受けつがれてきた<sup>の</sup>のでしょ<sup>う</sup>うか。

### <sup>ことば</sup>言葉

#### <sup>まつ</sup>祭り



<sup>ちいき</sup>地域には<sup>ひとびと</sup>人々が<sup>う</sup>受けついできた<sup>まつ</sup>祭りがあります。<sup>まつ</sup>祭りには<sup>ひとびと</sup>人々の<sup>な</sup>さまざまな<sup>ねが</sup>願いが<sup>こめ</sup>こめられていて、<sup>まつ</sup>祭りを<sup>ひとびと</sup>とおして<sup>つよ</sup>人々の<sup>むす</sup>結びつきも<sup>つよ</sup>強くなり<sup>ま</sup>す。

## 第5章 郷土の伝統・文化と先人たち

### 【道南に残る伝統行事を調べよう - 姥神大神宮渡御祭】



姥神大神宮渡御祭（江差町）



姥神大神宮（江差町）

写真提供：江差町

姥神大神宮渡御祭は、この土地の産物である、にしんの漁が終わった後に行ったお祭りです。江差町で8月に行われます。北海道で一番古いお祭りで、およそ380年の歴史があります。



このお祭りでは、どのようなことをするのですか。



「ヤマ」と呼ばれる、京都から取り寄せた立派な人形や旗で飾られた13の山車に、神様をお呼びする木の柱を立てます。山車にはそれぞれ名前がつき、お囃子とともに、まちの中を引いて歩きます。



立派な山車をつかった昔の江差町の人たちは、お金持ちだったのでしょうか。



「江差の五月は、江戸にもない」という言葉が残っており、江戸にも負けないにぎわいがあったことがわかります。



姥神大神宮渡御祭は、どんな人によって、何が、どのようにして受けつがれてきたのでしょうか。

## 第5章 郷土の伝統・文化と先人たち

### 【道南に残る伝統行事を調べよう - 松前神楽】



松前神楽（松前町）



松前神楽（木古内町）

写真提供：左の写真 松前町

松前神楽は、神事と舞楽を組み合わせた郷土芸能です。道南にある神社などで奉納されます。「神様へのご挨拶」である神事が12種類、「音楽や踊りを楽しむこと」である舞楽が21種類あります。松前の神社の行事で約400年前に神楽が奉納されたという記録が残っています。



木古内町にも、古くからある松前神楽が伝わっています。このことは、嬉しいです。



先生、この400年前の神楽は、今伝わっている神楽と同じものだったのでしょうか？



実のところ、400年前のものと今のものが、同じかどうかはわかりません。でも「昔から、大切に受けつがれてきたしきたり」であることは確かですから、松前神楽の伝統を誇りにしましょう。

### 調べる

松前神楽は、どのようにして受けつがれてきたのでしょうか。

### 言葉

#### 郷土芸能

地域の人々が、さまざまな願いをこめて自分たちで演じ、受けついできた、踊りや歌、演劇などのことです。

## 第5章 郷土の伝統・文化と先人たち

### 【<sup>う</sup>受けつがれてきた<sup>ふる</sup>古いもの】



寒中みそぎ祭り(木古内町)



松前神楽(松前町)

写真提供：松前町

### まとめ

調べたことをもとに、北海道の特色について話し合い、パンフレットを作りましょう。

まとめの活動に  
言葉を生かそう

- ・祭り
- ・郷土芸能
- ・アイヌ民族



寒中みそぎ祭りのしきたりを、さらにくわしく調べたいです。



ぼくは、姥神大神宮渡御祭のヤマについて興味があります。



私は、松前神楽がどんな思いで伝えられているのかを聞いてみたいです。

ワークシート  
二次元コードはスキャン

ここを  
クリック



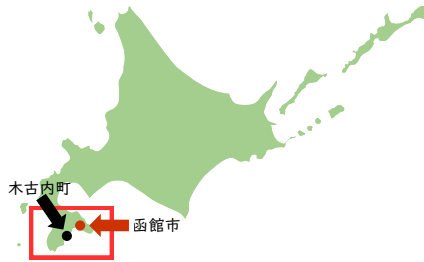
三つの行事について、グループで話し合ったことを、項目にしたがって表にまとめましょう。

## 第5章 郷土の伝統・文化と先人たち

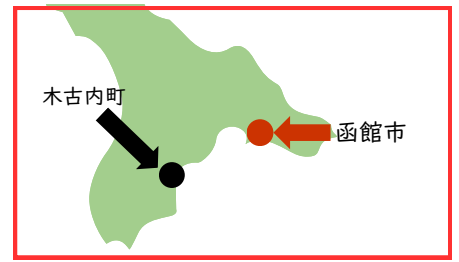
### 【近代都市のもとをつくった「函館市の水道事業」】



元町配水場のロゴ



木古内町と函館市の場所



拡大図

今では、木古内でも、当たり前を使う水道ですが、水をくむことが仕事のひとつだった時代もありました。昔の函館市では、水が足りずに大変な暮らしをしていたことを知っていますか。



昔であれば、函館のまちの中に井戸をほって、使っていたのではないのでしょうか。



函館市は、水不足について人口増加に合わせてどう解決したのでしょうか。



最初のころは、函館山のわき水で足りましたが、人口増加で不足しました。川の水をくんで運ぶ人もいましたが、その水は高価なものでした。高価な水を買えない人は、不衛生な水を飲むことも多く、まちに重い病気が広がることもありました。



たくさんの人が住むようになって水が足りなかった函館のまちは、どうやってみんなが水をたくさん使えるようにしたのかな？函館の地図を見ながら考えてみたいです。

## 第5章 郷土の伝統・文化と先人たち

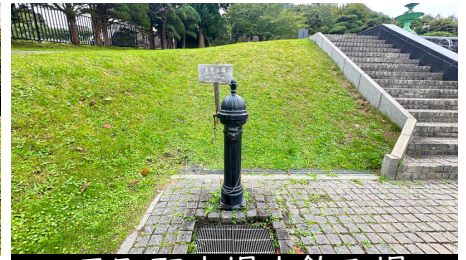
### 【<sup>はこだてし</sup>函館市<sup>ひと</sup>の人たちがい<sup>おお</sup>どんだ<sup>じぎょう</sup>大きな事業】



元町配水場入口



元町配水場噴水 清泉滾滾



元町配水場水飲み場

### 《<sup>もとまち</sup>元町の<sup>はいすいじょう</sup>配水場について》

<sup>げんざい</sup>現在も<sup>つか</sup>使われている、<sup>もとまちはいすいじょう</sup>元町配水場と呼ばれ  
る<sup>しせつ</sup>施設の<sup>しょうかい</sup>しょうかいをします。この<sup>しせつ</sup>施設は、  
<sup>はこだてやま</sup>函館山の<sup>ちゅうぶく</sup>中腹の<sup>すこ</sup>少し<sup>たか</sup>高い<sup>ところ</sup>所にあります。



なぜ、<sup>はいすいじょう</sup>配水場を<sup>たか</sup>高い<sup>ところ</sup>所に<sup>た</sup>建て  
たのでしょうか。



<sup>たか</sup>高い<sup>ばしょ</sup>場所に<sup>みず</sup>水を<sup>たため</sup>ためると、<sup>うえ</sup>上から<sup>した</sup>下に<sup>みず</sup>水が<sup>なが</sup>流れる  
という<sup>しぜん</sup>自然の<sup>ちから</sup>力（<sup>みず</sup>水<sup>おも</sup>の<sup>かさ</sup>重さ）を<sup>つか</sup>使って、<sup>まち</sup>まちに<sup>みず</sup>水を  
届<sup>とど</sup>けることができるのです。ポンプが<sup>じゅうぶん</sup>十分<sup>つか</sup>使え  
ない<sup>じだい</sup>時代には、<sup>たいせつ</sup>大切な<sup>くふう</sup>工夫でした。



でも、<sup>はいすいじょう</sup>配水場には<sup>べつ</sup>別の<sup>ばしょ</sup>場所から、<sup>みず</sup>たくさんの<sup>みず</sup>水を  
持<sup>も</sup>ってこないと<sup>いけ</sup>いけないのですよね。



そのとおりです。<sup>はいすいじょう</sup>配水場に<sup>みず</sup>水があれば、<sup>まち</sup>まちの中  
に<sup>みず</sup>水は<sup>とど</sup>届きますが、<sup>ここ</sup>ここまで<sup>みず</sup>水を<sup>はこ</sup>運ばなければな  
りません。<sup>はこだてし</sup>函館市と<sup>まわり</sup>周りの<sup>ちず</sup>地図を<sup>み</sup>見て、<sup>みず</sup>水は<sup>どこ</sup>どこ  
にありそうか、<sup>みず</sup>水を<sup>どこ</sup>どこから、<sup>どの</sup>どのように<sup>はこ</sup>運んで  
くれば<sup>よい</sup>良いのか、<sup>自分</sup>自分たちなら<sup>どう</sup>どうするか、<sup>はな</sup>話し  
合<sup>あ</sup>ってみましょう。

#### 言葉



#### <sup>はいすいじょう</sup>配水場

<sup>みず</sup>水を<sup>いったん</sup>いったん<sup>ため</sup>ためて、  
<sup>まち</sup>まち<sup>ぜんたい</sup>全体の<sup>すいどう</sup>水道を<sup>ささ</sup>支え  
る<sup>たいせつ</sup>大切な<sup>ばしょ</sup>場所です。い  
つでも<sup>あんしん</sup>安心して<sup>みず</sup>水が<sup>つか</sup>使  
えるようにしていま  
す。

## 第5章 郷土の伝統・文化と先人たち



元町配水場ポンプ施設

《もとの<sup>みず</sup>水の場所から、どのように<sup>みず</sup>水を運んだのか》

函館市<sup>はこだてし</sup>の人たちが水をとった場所は、亀田川<sup>かめだがわ</sup>という川でした。この川のきれいな水<sup>みず</sup>を、鉄の管<sup>てつかん</sup>で、元町<sup>もとまち</sup>まで導きました。  
(長さは約9.4キロメートル。木古内駅<sup>きこないえき</sup>からサラキ岬<sup>みさき</sup>までのきより9.3キロメートルと同じくらいです)

亀田川<sup>かめだがわ</sup>の水源<sup>すいげん</sup>は、元町<sup>もとまち</sup>の配水場より高い場所<sup>たか</sup>にあったので、熊本県の通潤橋<sup>くまもとけん ふうじゆんきょう</sup>のような仕組み<sup>しく</sup>で、自然<sup>しぜん</sup>の力で水<sup>みず</sup>を元町配水場<sup>もとまちはいすいじょう</sup>に届けることができたのです。

うめられた直径約30センチメートルの鉄管<sup>てつかん</sup>は、当時は日本<sup>とうじ にほん</sup>ではつくることが難しく、イギリスから取り寄せた高価<sup>こうか</sup>なものだったそうです。

## 第5章 郷土の伝統・文化と先人たち



元町配水場 函館水道発祥之地



元町配水場ポンプ場

### 《どうして水道が必要だったのか》



函館市が大きくなるにつれて、こんな問題が出てきました。

- 生活に使う水の不足
- 病気が広がりやすくなること
- 火事の消火に必要な水の不足



水が足りないということは、いくつもの理由で命にも関わることなのですね。



でも、その水道工事のためのお金はどうしたの？



それは大きな課題でした。水道をつくる計画は何度も立てられましたが、工事のお金が足りず、計画は実現できませんでした。しかし、お金を集めるための工夫をして、ようやく1889（明治22）年、神奈川県横浜市に次ぐ、日本で2番目の近代水道が完成しました。どのような工夫をしたのでしょうか。

## 第5章 郷土の伝統・文化と先人たち



元町配水場の緑地（函館市）

### 《函館市の水道はどう整備されたか》

水道ができると、まちは安心して暮らせるようになりました。  
その後、さらに人口が増えると、より多くの水が必要になり、

- 笹流ダム
- 新中野ダム

などの新しい施設が整備されました。函館の水道の施設はより大きく、便利になっていきました。



水道の発達がまちの成長を支えたのですね。



そのとおりです。大きなまちほど、水の確保は重要になります。

## 第5章 郷土の伝統・文化と先人たち

### 【まとめ 函館市の水道から学べること】



元町配水場

この学習では、水不足という大問題を、函館市がどのように乗り越えてきたのかを、自分たちで、話し合い、想像しながら、学びました。

**まとめる**

調べてわかったことや考えたことをまとめて発表しましょう。



函館の水道って、「たくさんの人々による努力」によって、できたのですね。



ぼく、水がどうやって配水場からまちへ流れていくのか図にしてみます。



私は、昔の函館市の人たちの工夫をもっと調べてみたいです。



ワークシートにまとめたことを振り返ると、函館市の水道がどのように発展したかが、よりよくわかるかもしれませんね。

ワークシート  
二次元コードはスキャン



はこだての  
水道と下水道  
二次元コードはスキャン

